「東京オリンピック招致」

追手門学院大手前高等学校

2年 李 維寧

みなさんは東京オリンピックにどのような想いを抱いていますか？ 私は今回日本が開催国となることで、被災者の方々に希望を、全世界の人々に感動を与えてほしいと願うと共に、外国人に日本の良さをより知ってほしいと思います。

私がオリンピックと聞いてまず頭に浮かぶのは、兄が小学生の頃、御クラブの方々に長野オリンピックへ招待して頂いた思い出です。兄は何度も当時の思い出を熱く語りました。各国の声援・歓声が行き交うオリンピックは国際社会のなかでの日本を身近に意識させてくれる大イベントだったそうです。全世界の選手に囲まれ活躍する日本人選手は、それまで海外に行った事のない兄に国際交流の素晴らしさ、果敢に海外に挑戦する事の大切さを教えました。

私はそのような兄の姿に影響され、去年一年間、英語を勉強するためにアメリカに留学しました。私は日本で生まれ育った中国人ですから、日本人の良さとはなにか人一倍敏感に意識してきたつもりです。しかし留学先の高校で日本について説明して欲しいと尋ねられた時、私は自分がどれだけ日本について上手く伝えられたらどうかと悩むときがありました。

しかしオリンピックの招致スピーチを見て、大切なものは私たちの身近な所にあると気付かされました。それは今回の招致テーマでもある「おもてなし」の心です。英語では Hospitality, 中国語では「熱烈歓迎」と訳されるこの言葉が、どれほど世界中で忘れ去れている事でしょう。外国語には訳す事はできても、日本ほどこの考えを大事にしてきて、実践している国はないと思います。

2020年。日本で世界が一つになります。東京で開かれるオリンピックで、国民が一丸となり、国際社会において様々な感動を与える場になると信じています。そして私自身も今回のオリンピックを通じて成長し、将来一人でも多くの人に日本人の良さを伝えられる、日本で育った外国人として胸を張って国際的に活躍できる人になりたいと思います。

「東京オリンピック」

文京学院女子高等学校 二年

朴 香み

2013年9月、世界で注目される中、2020年オリンピック東京開催が決定した。かつて日本は1964年アジア地域で初めて開催されたオリンピックで敗戦からの急速な復活を世界に認めてもらった。2011年東日本大震災で日本は様々な面でダメージを受けたが、今回のオリンピックでもその復興を世界にアピールすることが期待される。

今回のオリンピック成功させる最も重要な方策として、私は外国人の積極的雇用を提案したい。東京大会に伴う建設、設備の需要が増し、雇用機会が増える一方、急速な高齢化と若年労働者の減少により、労働者不足のおそれがある。政府は外国人労働者を受け入れる方針を考えているが、国民の雇用機会が減ってしまうことや外国人労働者による犯罪が増加することを懸念する人達も多い。しかし、私は受け入れの方法を整えることにより懸念される問題点は十分解決できると思う。日本で働く外国人達は単にお金を稼ぐために来日したのではない。日本の進んだ技術や社会制度を学び、母国の発展に貢献したいと思って来日したのだ。彼らを単純な労働力と考えるのではなく、貴重な人的資源とみなすべきだ。彼らには日本語学習を含め、きちんとした研修を行えば、彼らはきっとその期待に応えるはずだ。国内の企業においては日本人以上に積極的に働くであろうし、帰国後は母国において経済、政治のリーダーになるだろう。そこから日本と各国との新しいビジネスが生まれ、新たな雇用も生まれるのだ。もちろん、無計画に受け入れることはできない。韓国の外国人雇用政策を参考に、受け入れ職類や受け入れの上限数を検討し、送り出し国との二国間協定を結ぶ必要がある。

東京オリンピックを成功させるには、外国人にも働きやすい環境を整えることが必要である。それはオリンピックの成功だけでなく、その後将来に渡り、日本と外国人労働者を送り出した国の両方に大きな利益をもたらすことに繋がるはずだ。

「私は一本の矢」

履正社高等学校2年

岡田 明日馨

私は高校から弓道を始めました。

友達に誘われたことが弓道を習い始めたきっかけで、今は高校で主将をしています。

弓道が続ける中で、私は日本の武道の奥深さ、素晴らしさを肌で感じるようになりました。それを感じるのは弓道場で、そこは独特の緊張感に満ちていて自然と身が引き締まり、集中力が研ぎ澄まされてくるのです。

日本の武道は必ず礼に始まり例に終わるという特徴がありますが、これは自分の技と精神の至らなさを知らせてくれる相手に対する感謝の気持ちを表すからです。武道に限らず他のスポーツでも日本の選手のマナーの良さは評判になっています。

たとえば、ソチオリンピックの角野選手に見られるように、コーチともどもコースに向かってお辞儀をするのは、人々に印象付けるためではなく、出場する機会を与えてくれた全ての人々に感謝するのが日本の伝統だからです。

とりわけ弓道は敵よりも自分との闘いが要求される武道で、「自分に克てないで他人に勝つことはできない」という言葉にその精神が最もよく表されているように思います。これは私にさまざまなことを教えてくれました。というのも矢を射る前に自分との闘いに打ち克たなければ、矢は正しく飛んでくれないからで、その日の心の持ち方、体調、呼吸の仕方までが結果を左右します。このように精神的な要素が非常に大きいのです。

「明鏡止水」の精神：つまり一点の曇りもない鏡ときざ波一つ立たない水面のように心を鎮める。これがアーチェリーとまったく違う点です。

「誰もができることをだれもできないぐらいまで繰り返すこと」、それが稽古の本質なのです。

他のスポーツのように弓道は「練習」とは言わずに「稽古」と言います。稽古とは、自分が弓に同化し、一本の矢となった的を目指して飛んでいくまで、精神を集中すること。その地道な努力が結果をもたらすに違いありません。

私には全国大会に出場し、さらに将来海外で弓道場を開き、世界の人たちに日本武道の精神を伝えていくという大きな目標があります。いろいろな壁がこれからもあることでしょう。でも私は目標を達成するまでどんな努力でも続けていく覚悟です。

「東京オリンピック招致」

立教大学2年

高橋智美

2020年の東京オリンピックはとても楽しくなるだろう。しかし、パラリンピックの存在も忘れてはならない。例えばテニスの国枝慎吾選手は、過去のパラリンピックで幾つものメダルを獲得してきた。そのためパラリンピックも非常に楽しみだ。

だが私は長い間松葉杖を使用しており、障がい者という観点ではパラリンピック選手たちが簡単に日本を回れるかが心配だ。日本は障がい者にとって優しい国とはいえないため、2020年までにより障がい者が快適に過ごせる国に変えたい。その実現のため、バリアフリー先進国から色々なことを学ぶ必要がある。

10歳でカナダを訪れた時、障がい者のための機器をたくさん目にした。その後日本で車椅子を使い始めたが、嫌な思いを何度もした。まず、自力で行けない場所が多く、やりたいことをたくさん諦めた。また電車などに乗ると周りの人々にじろじろ見られ、非常に恥ずかしかった。今はほとんどの場所に歩いて行けるが、その惨めな気持ちを忘れたことは無い。日本の他の障がい者の方々も、私と似たような問題に悩んでいるのではないだろうか。

この解決のため、二つの提案をしたい。

最初に物質的な妨げを解消するため、使い手にやさしい機器をもっと日本に導入できる。私のカナダ旅行は11年前であるため、外国にはより使いやすい施設があるはずだ。

二つ目に意識的な壁を取り除くため、私たち障がい者の不快な気持ちを理解することの重要性を人々に伝える必要がある。このスピーチコンテストのようなたくさんの方が参加できるイベントを通じて、人々はそれぞれ異なるかもしれないが、それでも皆同じ人間の本質を共有しているという認識を広めていきたい。

これらのため、「福祉先進国」と呼ばれるような外国の国々を訪れ、障がい者がどのように社会で人々と共存しているのかを学びたい。日本をバリアフリーな国へ変えることが難しいのは分かっているが、私は実現できると信じている。

「東京オリンピック招致」

桐朋女子高1年

大江 奈巳

オリンピックは素晴らしいイベントです。

4年に一度、約200カ国から1万人のアスリートが集結し、2週間にわたりスポーツを通して生まれるドラマや興奮を私たちに与えてくれます。

私にとってオリンピックとはトップレベルのアスリートたちの活躍を見る物だけでなく、世界中の人々、国や地域、そして文化を学ぶ良い機会だと思っております。

2020年の夏、オリンピックは東京で開催されます。イメージしてください。母国に響き渡る喚声を。興奮の渦を。感動の涙を。それらがすべて東京で味わえるのです。

私は、オリンピックはリレーと同じだと思います。

ギリシャから始まり、オリンピックの伝統を私たちに託してからは、4年おきに聖火を国から国へと次の世代へと渡してずっと続いていく長い長いリレーです。

そして6年後、聖火は私たちの国へとやってきます。私はその時が待ち遠しいです。なぜなら開催される国、日本は、世界一素晴らしい国だと私は断言できるからです。特に東京はいろいろな意味でも世界一。

世界を旅する7万5千人の旅行者を対象として行った最近の調査によると、安全性、公共交通機関、町の清潔さ、さらにタクシーの運転手の親切さにおいても第1位の評価を受けました。

私たちは我が国を、東京を誇りに思わなければいけないのです。

私が生まれてから行われてきた夏季オリンピックを辿ってみると、2000年のシドニーオリンピックは、五輪開催をきっかけに国策として人材開発を行った結果、世界のスポーツビジネスで活躍するオーストラリア人をたくさん生み出しました。2004年のアテネオリンピックは、オリンピック発祥の地という原点に立ち返った歴史の重さを感じさせてくれました。2008年の北京オリンピックは、中華人民共和国が国の威信をかけて開催した大会。世界最大の人口を誇る中国が、人手と伝統を注ぎ込み、発展のさなかの力を見せつけたこのオリンピックはいろいろな意味で他国には真似できないものだったと思います。そしてまだ記憶に新しいロンドンオリンピックは、オリンピック史上初めてすべての国や地域から女性選手が出場した、新しい大きな一歩となる記念すべきオリンピックでした。

このようにオリンピックは開催される国によって全く違ったイベントとなるのです。

2020年のオリンピックはどのようなストーリーが生まれるのでしょうか。そんなことは誰にもわかりません。ただ私は信じています。

この大会が私たちにあって掛替えのない宝物になるということ。

「ボランティア」

リノール女子学院高2年

井上 玲

私があしなが募金活動に参加したのは、何か人の役にたつことがしたいと思ったからだった。しかし、このオープニングの言葉を聞いた瞬間、私の心の中で募金活動に対する姿勢が変わった。自分と同じ学生で、まったく異なる境遇に置かれている人がいる。だれのせいでもなく、何の前触れもなく、突然そうなってしまった人がいるということを知ったのだ。

毎日、テレビや新聞に「死亡」という言葉を見ない日はない。亡くなったのが一人であっても、その人には家族がいる。これは決して他人事ではないのだ。私はそれまで数字でしかなかった「人の死」が、どれだけ重いものなのかを感じることができるようになった。

私はこれまでに、NPOさきしま共生会主催の「ホームレスのための炊き出し」にも参加してきた。ホームレスの人たちは、食事券を配る時も自然と列を作り、みんなでゲームを楽しみ、場を盛り上げていた。それは、私が想像していた「ホームレス」のイメージとははるかに違う光景だった。私は、ホームレスの人たちの優しさや笑顔を知り、「ホームレス」という言葉ではなく、笑い、歌い、食べる「人」を知ることができた。

ボランティア活動は私にとって、生きた学問だ。これらの活動を通じて、私は「無常」を実感し、日本人の礼節や人間の尊厳、そして何より、共に生きる仲間を知ったのだと思う。

4月から私は受験生になるが、これからも様々な人たちとの交わりの中で、生きた学びを大切にし、「共に生きていること」を実感できる人になりたいと思う。

「東京オリンピックについて考えること」

学習院大学高等科2年

高西理紗子

2020年、東京でオリンピックが開催される。ソチオリンピックで世界が盛り上がっている今、オリンピックの意味や、東京で行う意義について考えた。オリンピックは様々な国籍のトップアスリートが集まって競い合うスポーツの祭典である。スポーツは「言葉の壁を越えて」人々を繋ぐことができる。しかし、オリンピック主催国にとっては、その「スポーツで世界を繋げる」ことだけにとどまらない意味があると思う。それについて述べたい。

開催国によって中身を大きく変えるオリンピック。そのオリンピックが今の東京でどうなるのか、ワクワクした。2020年の東京オリンピックは日本の将来において大きな意味を持ち、目的をもって行い成功すれば大きなチャンスになると考えている。そしてそれを決して逃してはいけないと思う。

その目的とは、日本人は「日本」を見直し、世界の人々に「日本」を知ってもらうことだ。国際化した社会の中でしっかりと日本人としてのアイデンティティを持ち、日本をアピールすることを考える過程で、埋もれていた生活や文化の「日本らしさ」を再び掘り出すことができるだろう。

私は海外に住んでいたことがあり、他の国と比べることで日本の良さが改めてわかった。それは当たり前だと思われる治安の良さや、日本人全般に共通の勤勉さだ。また二つ目の、「日本」を知ってもらうことは将来の日本にとって有益である。オリンピックの観戦に日本を訪れた外国人が、例えば電車が遅れて観たかった競技に遅れてしまったとしても、そのとき助けてくれた駅員さんの心遣いや、その後夕食を食べに入ったレストランで受けたおもてなしが心に残れば、イメージはプラスになるものである。そのような小さな良いエピソードがあふれるようなオリンピック開催国でありたいと思う。そのためには私たち一人一人が自覚を持つことも必要だ。

「私の夢」

実践女子学園高等学校1年

石井陽菜

あなたは、日本人はどれぐらい英語力があるか考えたことありますか？最近では滝川クリスのように何カ国語も話される人が増加してきているようですが、実際日本人はどれぐらい話せるか知っていますか？信じられないかもしれませんが、日本はTOEFLのスピーキングの点数によると147カ国中147位でした。これによって私たちがどれだけ英語でコミュニケーションするのが苦手かわかります。これによって私は英語の先生という立場から日本の教育改革をしたいと決心しました。

私はアメリカに住んでいたとき幸いなことに現地の学校に通いユニークなコミュニケーション力を得ることができました。私の経験から考えるとアメリカ人が持っているコミュニケーション力は幼稚園の時に行なわれているゲームなどのものからきていると思います。その一つは“Show and Tell”というゲームです。これはただ単に家から好きなものを学校に持ってきてクラスのみんなに簡単に説明するだけです。なので当時英語ができなかった私も発表できました。そしてもう一つは、アメリカは日本と違って教科書のみでの授業をやらず楽しい活動などもしながら学んでいきます。その結果、生徒は直接的に学ぶことができるのでとても印象が強くなります。私は日本のコミュニケーション力の向上を達成するにはこの“Show and Tell”のシステムと教科書のみではなく様々な活動から学ぶ方針を日本に取り入れたいと思います。

私は英語の先生になって教育改革を行いたいです。生徒は自分で好きなものについて語っていると思っていりかもしれませんが、これがまさにコミュニケーション力に繋がってくるのです。このようなことを幼い時から取り組んでいたら私は日本人の英語のコミュニケーション力は進歩すると思います。日本はもっとTOEFLのランキングで高く評価されてもおかしくないのにされないのは英語のコミュニケーションが足りていないからです。私は未熟な日本人を国際的にたたかっているようにしたいのです。このように教育を改革するともっと多くの日本人が英語が話されるようになるだけではなく、日本が国際リーダーになるため一歩近づくことができるでしょう。

「ボランティア」

獨協埼玉高校3年

田嶋 幸志

みなさんはボランティアとはどのようなものだとお考えですか？
私はボランティアとは困っている人を助けることだと思っていました。
しかし、ふたつの体験でボランティアとは他人を助けることだけでなく、自分のためでもあることに気がきました。

2011年の東日本大震災後に、私は米国テキサス州サンアントニオに留学しました。

そこで、体が不自由で車いすと共に生活するお年寄りのために、玄関に傾斜を作るボランティアをしました。

しかし、私が訪ねた家はすべて、今にも崩れそうな貧困地域の家ばかりでした。あるお年寄りの女性の家の傾斜が完成した時、その方は心の底から喜び、涙を流しながら私を抱きしめ、感謝の気持ちを表してくれました。この時初めて、自分が社会問題の現場に立つことができ、私が小さいことでも人の役に立てるのだということに気が付き、私自身もうれしかったのです。

日本に帰国後、私は福島県郡山市「おたがいさまセンター」に行き、仮設住宅で暮らすお年寄りの方々と話をしました。

ある方は泣きながら、東日本大震災のことについて話してくれました。すると17歳の私と話したことで、みなさんの顔に安心した表情が見られたと同時に、私の心も温かくなりました。

私はサンアントニオで体の不自由なお年寄りのために傾斜を作り、福島の人たちの曇っていた心に光を照らすことができました。

しかし、実際は、私が助けた方たちが私のために未来への懸け橋を作ってくれたのではないかと思いました。

ひとつの地球のなかで、我々はお互いに支えあって生きているということを忘れずに、これから私は、世界の一人でもより多くの人々の笑顔を作れる存在になります。

「災害復興支援を考える」

高田高校2年

杼原 和希

昨年3月、私は高校生レポーターとして東北を訪れました。宮城県三陸町では震災を風化させないために「語り部バス」が運行されておりそれに参加しました。震災の爪痕の残る被災地を巡り、震災当時の様子や現在の復興に向けての活動をガイドの伊藤さんが語ってくれました。震災から2年が経過していましたが、津波の被害の爪痕を見た私は、その気持ちを言葉でうまく表現することができませんでした。しかしメディアからは決して伝わってこないものがあるということが分かりました。ガイドの最後に伊藤さんは一枚の写真を見せてくれました。それは娘を命名した時に書かれた色紙でボランティアの人が見つけてくれたそうです。それを見ると生きていることの尊さや支援してくれている人たちへの感謝がこみあげてくるという話しをしてくれました。心を揺さぶられるような話をたくさん直に聞くことができました。友達を連れて再訪したいと伊藤さんに約束しました。

その後被災地で見聞したことをSNSで発信をしたり、友達に伝えましたが、実際現地を訪れていない人達との間に大きな隔たりがあり、伝えることがいかに難しいかを痛感しました。また時が経つにつれ私の気持ちも薄れてしまいました。

先日新聞で「語り部」のプロジェクトが継続していることを知り、伊藤さんの言葉が蘇りました。「私達が一番恐れていることは震災の風化です。」私は東北での体験が風化していたことを恥じるとともに、友達と被災地の人々の架け橋になりたいと強く思うようになりました。

私は、震災の爪痕、復興現場を自分の目で見ることが一番の復興支援になると信じています。そこで東北への修学旅行を提案したいと思います。人的交流の促進だけでなく観光産業にも利点があります。復興を身近な問題としてとらえられるように、交流の機会を増やしていくことが何よりの復興支援につながると考えます。

私の夢 「心の輪を、世界へ」

智学館教育学校5年

安達諒子

私には夢があります。それは、世界の人々すべてが思いやりの心を持つことです。そのために、私は世界にこの思いやりの心を訴えたいです。自分の力だけでは、どうにもならないかもしれませんが、いつか叶うと信じています。

私がこの夢をもつきっかけとなったのは、2011年3月11日に起きた東日本大震災での出来事です。怖くて不安でいっぱいの中で、忘れられない三つの出来事がありました。

一つ目は、停電で信号が消えた交差点でも、私を乗せた車が無事に前に進むことができたことです。どのドライバーもお互いにアイコンタクトをとり、譲り合って交互に通るようにしていたのです。こんな状況下でも誰一人自分勝手に行動していませんでした。

二つ目は、電気も水も使えず困っていると、近所の方が井戸水をポリタンクに汲み、持ってきてくれたことです。水が手に入ったことも嬉しかったのですが、私達のことを気にかけてくれたことにさらに感動しました。

三つ目は、誰もが食料品の買い控えをしていたことです。震災後しばらくは食料品が何もない状態でした。数日後、近くの店が営業を再開しましたが、食料品の数は限られていました。多くの人が買い物に来ていましたが、どの人も必要以上に買うことはありませんでした。

こうした思いやりの心は、日本人だけに限ったものではありません。今回の震災の際も海外の方々がボランティアや義援金という形で日本を助けてくれました。しかし、未だ世界には紛争や貧困など、多くの問題が存在します。思いやりの心の輪が世界中に広がり、みんなが手を取り合って助け合って生きていけないものでしょうか。私は募金活動などの身近なことから始め、心の輪が世界へ広まるよう、これからも世界へ訴えかけていきます。

「私の夢」

神戸国際大学附属高等学校

松田拓哉

『有効！ 技有り！ 一本！』

13年間にわたり、私を何度も励ましてきたこの力強い言葉を耳に響かせながら、今私はこの演台に立っています。『なぜ、私のような柔道部員が英語スピーチコンテストに？』そんな疑問を持つ人もいるかもしれません。

かつて、すばらしい柔道家であった叔父の『柔道の本気でやるなら、世界一を目指せ！』の言葉に励まされながら、日々柔道の練習に明け暮れました。

しかし、人生はそう甘くはありませんでした。小学6年の夏、わたしは右腕に致命的な負傷を負いました。手術の後、右手は、正常に機能しないかもしれないというドクターの厳しい言葉に私は、絶望的な気持ちになりました。しかし、『右腕がだめなら、左腕を鍛えるんや！』そんな母の強い言葉に励まされ、私は再び努力を続け、2013年8月、とうとうインターハイ出場を果たしました。

さて、今の私には、2020年、東京オリンピックへの出場以外に、もう一つの大きな夢があります。これまでの13年間、柔道が私に教えてくれた『柔の精神』を基に自分の力でアフリカの子供たちを教育したいのです。

2010年現在、アフリカでは、児童の薬40パーセントが初等教育を受けていません。若い世代の教育こそが本当の意味での将来のアフリカの自立を実現させるのです。

私の最初の目標は、NGOの一員として、様々なプロジェクトで積極的に活動することです。そして、今日ここで皆さんの前で、私の強い決意を再確認することが夢実現への第一歩だと考えます。

私は、日本の柔道選手として生まれてきたことへの感謝と誇りの証として、たとえ小さな橋でもいい、日本とアフリカ大陸をつなぐ架け橋になりたいと思っています。

「私の夢」

麗澤高校2年

佐野 光

私の夢はいろいろな国を訪れて、さまざまな国の人に出会うことです。私がこのような夢を持つようになったのは、アメリカでのホームステイの経験があったからです。

アメリカ滞在中、私はホストブラザーに、好きな言葉はなんですか？と聞いた際、彼は「spontaneous」と答えました。これは、「自発的な、進んでする」という意味を持つ言葉です。日本人はきちんと先のことまで考えて行動しようとしませんが、彼はやってみなきゃわからない、今やりたいと思って、今できることだったら、今やるべきだという考えでした。それは、日本人より、大胆でチャレンジ精神旺盛な考えでした。

実際ホームステイの間、ホストブラザーを含む現地の生徒が、知っている日本語を間違っていようと関係なく、一生懸命話していました。それをみて、私はとても嬉しく思うと同時に、自分にかけているものを感じました。私は最初、自分の英語に自信がなく、自ら話しかけることに消極的でした。しかし、生徒たちのその積極的な姿勢を学び、言葉の壁があっても伝えようとする気持ちと、話しかけるという積極性が大切なのだということに気付かされ、自分もそのように変わらなければと思いました。

私はこの経験を通して、「考えの違い」と「積極性」ということを学びました。積極性といっても、日本人と他の国の人とでは、やはり、違いがあるということを知り、そこには国民性や環境などが影響されているというように感じました。日本人は謙虚で冷静でといったようにいい点はたくさんありますが、日本人が持っていない良いところが、他の国の人にもたくさんある思い、もっと知りたいと思うようになりました。

これからも積極的にさまざまな人と出会い、その考え方から学び、自分を向上させたいと思いました。そして、私を変えるきっかけとなったこの経験をさせてくれた両親にも感謝し、自分の夢を叶え、日々輝き成長する姿をみせていきたいです。

「私の夢」

立教大学1年

小泉恵美

みなさんは7歳の時、何をしていましたか？

私は7歳の時初めて、世界の貧困に目を向けました。

「1, 2, 3このたった三秒で世界ではみんなと同じくらいの年の子どもがお腹を空かせて死んでいたり、戦場において殺されているんだよ。」

これは小学校6年生の先輩がユニセフ募金のためにしてくれたスピーチです。その当時小学校1年生、7歳だった私にとってそのスピーチはとても衝撃的なものでした。世界には自分と同じ年なのに学校にも通えず、友達とも遊べない子がいるのだと思った瞬間に今まで見ていた世界が違った世界に見えました。そして、世界の子どもたちのために何かしたいと思うようになりました。私の夢は世界中の子どもが笑顔に暮らせる世界をつくることです。

スピーチをきっかけに何かアクションを起こしたいと思っていましたがなかなか自分の年齢と見合う活動が見つかりませんでした。そんなときに、高校3年生のとき家庭科の教科書を読み、Free the children Japanという団体に出会いました。この団体は当時12歳だったカナダの少年クレグ・キールバーガーが立ち上げた団体です。貧困や児童労働から子どもを解放すること、子どもは無力だという考えから子どもを解放することをミッションとして、主に中高生が活動しています。

私はFree the children Japanを通してインドの学校建設のためやフィリピンの台風被害への支援のための募金活動、水や女の子の教育についての勉強会など様々な活動を行いました。確かに初めは自分か起こしているアクションが小さいものに感じるかもしれませんが、それが10人、100人、1000人と輪が広がっていけば、大きなアクションに繋がっていきます。私は活動を通して、同じように世界を変えたいと思っている人たちに出会い、彼らと一緒に今アクションを起こしています。一人ひとりが世界を変える力を持っています。

みんなと一緒にやれば、世界は変わります。私はみんなと一緒に夢を実現していきたいです。

「私の夢」

立教大学2年

城戸希実

「日本を世界に伝える」－それがわたしの夢です。
とくに、日本人の接客の丁寧さと日本の節目を大切にす文化を世界に伝えたいです。
ニュージーランド、ミャンマーやイギリスに行ったことがきっかけでこれらの日本の良さについて改めて気づくことができました。

日本人の接客の丁寧さは本当に格別です。わたしは日本でお寿司屋さんでアルバイトをしていましたが、必ず両手を添えてお客さんの目の前に料理を出していました。外国の接客は日本ほど丁寧ではないです。例えば ミャンマーのホテルに去年滞在した時には店員は音を立たせて机の端に飲み物を置いていることがありました。

日本では節目を大切にす文化に成人式、七五三、初詣があります。それらが日本に固有なものだということを海外に行くことで改めて実感しました。成人式をこの間終えたばかりなので成人式に注目して話します。イギリスの文房具屋で誕生日カードをみていた時、20歳を祝うカードは一枚もありませんでした。そのときに始めて外国では、日本のような成人式がないことに気づきました。成人式は人生の1区切りをつけるのに大切な役割を持っています。自分を支えてくれた周りの人に感謝の気持ちを持てるからです。

どうして日本の対応の丁寧さと節目を大切にす文化を伝えたいのか…
その2つはわたしたち日本人の大切にすべきものだと思うからです。日本人の優しい対応はわたしの元気の源だから。節目を大切にす文化はわたしを励ましてくれる機会をくれるから。わたしは世界中の人にこの日本の良さを伝えたい。これがわたしの人生での大きな夢です。

夢の第一歩として今年挑戦したいのは「外人向けのツアーガイドボランティア」です。それを通して自分も日本の良さについて学び直せたらいいなと思います。

「私の夢」

広島女子大学2年

徳丸翔子

「夢」という言葉を聞くと、私は小学校の卒業文集を思い出します。「パティシエ」「学校の先生」「野球選手」といった思い思いの「夢」を、皆が生き生きと書き記していたことを今でも昨日のこのように思い出します。肝心の私はというと、明確な「夢」がありませんでした。ただ、「将来どんな人間になりたいか」という、夢ではなく理想」ならあると、当時の私は書いていました。12歳の私の理想とは、チャレンジ精神旺盛で、気持ちの切り替えが早くて、優しさと厳しさを兼ね備えていて、そして、モノを粗末にしない人間になることでした。

18歳の夏、私は大学のフィールドワークでタイに行きました。それが私の人生初海外でした。タイに行く前は、未知の世界への期待と不安に押し潰されそうで生きた心地がしませんでした。日本へ帰る頃には世界観がガラリと変わっていました。まず、「生きた象が路上を徘徊している」などという私のステレオタイプなイメージは、地元・広島とは比にならない大都市・バンコクの膨大な交通量を以て打ち砕かれました。そんな冗談はさて置き、私の中で他の何よりも強く印象に残っているのは、子どもたちの顔いっぱい咲き誇る”笑顔”と心温まる”おもてなし”、そして、夢中で語ってくれる”将来の夢”でした。幸せそうに恋の話をしてくれる女の子たちも居ました。当時、大洪水に見舞われて深刻なダメージを受けていた筈のタイでしたが、彼女たちは日本の子どもたちよりずっと、きらきらと輝いていました。「豊かさは、何だろう」と、漠然と疑問に思ったことを憶えています。

20歳を迎えた日、アメリカに留学中だった私は、情けないことに、孤独と恐怖に怯えて泣いて、バングラデシュ人の親友に必死に励まして貰っていました。日本に居たとき以上に無力で特に取り柄も無い私でしたが、結果的に、留学後の今でもお互いの身を案じ合う、たくさんの掛けがえのない友人ができました。今の私の「夢」は、インタビュアーになって世界じゅうを翔びまわって、これまで私と出逢ってくれた友人やまだ見ぬ友人の人生や夢の story teller になって、恩返しをすることです。先日、ある恩師の紹介で留学以前から参加させて頂いているフェアトレード講座にて、「世界平和を実現しようと思ったら、それぞれの国の友人を作ればいい」という話をお聞きしました。留学を終えてみて、私もその通りだと思います。これからも、小さな出会いを大切に、そして、12歳の頃の私の理想に忠実に、生きてゆきたいと思います。

「私の夢」

愛知県立千種高等学校2年

橋本志保

“わたしの夢”を作文に書きましよう。小学生の頃、そんな授業があった。
「サバンナを走り回るライオンを見ること。青く澄んだ海でクジラやイルカと一緒に泳ぐこと。」そのときわたしはこう書いて、先生から「書き直し」と言われたことをよく覚えている。
先生が望んでいたものは、どんな仕事をしたいのか、どんな大人になりたいのか。そういう作文だったのだ。

わたしは幼いころから動物や植物が好きだった。
初めて山にキャンプへいったとき、小さな鳥の声を追いかけ、山の奥まで入っていった。初めて海に潜ったとき、自分も海の一部になったような気分になった。冬にスキーに行ったとき、真っ白な雪に触れて愛しいと思った。
そしていつのまにか、もっと広い自然を見てみたい。日本だけでなく、もっともっと沢山の国の自然に溶け込みたい。そう思うようになり、それが“わたしの夢”になっていった。
しかしわたしは、世界の美しいサンゴが環境破壊によって死んでいっていることを知った。
森林は伐採され、空気は汚れ、北極の氷さえ溶けてしまう。動物の棲みかは減り、絶滅危惧種が増える。
そしてそのほとんどが、人間のせいだということも知った。わたし自身が壊してきたことを知った。罪悪感とともに、わたしの夢は叶わないかもしれない、そんな気持ちさえ感じるようになった。

高校2年生になった今、進路希望調査という文字を見て、やはり一番に浮かんだ希望は「サバンナを走り回るライオンを見ること。青く澄んだ海でクジラやイルカと一緒に泳ぐこと。」だった。諦めることは出来なかったのだ。
わたしは、環境学が進んでいるといわれるオーストラリアの大学に進学し、環境のことやエコツアーリズムについて勉強をする、という進路を選択した。どうすれば人間と自然が共存することができるのか、学び、地球のために役立てたい。
そして、何十年後の地球の子供たちも、同じような夢をみる事ができるように。